

読み返す

2023.8.3

いろいろな方の話を聞いたり、書物を読んだりしていると、同じ本を何度も読んでいたという話を聞くことがある。愛読書とでもいうのだろうか。私には、これがない。1冊の本は、一度読んだら、それでおしまいである。ただし、教育書は違う。必要に応じて、繰り返し読むことがある。

愛読書がないのも、どうかと思う。よく読む著者はいる。だからといって、ハルキストのようにその方の熱烈なファンというわけではない。その著者の本を全部読みたくなるだけである。どうも昔から、我が人生は、オリエンテーリング的なところがある。そこに行ったことが大事なのである。その本を読んだことが重要なのである。だから、二度めは必要ない。

こんな感じなので、行きつけの店も少ない。それでも、昔よりは、何度も通うお店は増えた。新規開拓が限界にきているともいえる。乱雑な我が書斎には、所蔵できるスペースがない。あとは、積み重ねるしかない。読まなくなった書物を処分すればいいのだが、もったいなくて、それもできずにいる。

そこで、考えた。オリエンテーリング的なスタイルを変えるのである。以前読んだ本をもう一度読んでみるのである。ほとんどの本は、その内容を覚えてはいないため、初めて読むのと変わらないだろう。愛読書をつくりたいわけではない。これから新しい本を手にする前に、今ある本に思いをはせるべきなのではと考えた。

今から、もう一度読み返すことを楽しみにしている本がある。夏目漱石の「こころ」である。実は、小説を読み返すのがこわい。10代後半の時期に読んだような感動を得ることができるのだろうか。もし、得ることができなかったとしたら、自分が衰えているということになりはしないか。そんな不安がある。評論や随筆は、さほどの影響はないだろう。かえって、今、読んだ方がいいものもあるだろう。

そういえば思い出した。繰り返し読んできた文学作品があった。ヘルマン・ヘッセの「少年の日の思い出」、井上ひさしの「握手」、太宰治の「走れメロス」、そして魯迅の「故郷」である。これらは、国語の授業担当者として、何度も読んできた。純粋な読書とは違う。最初から、生徒の前で授業をすることを前提に読んでいた。それでも、読むたびに心を動かされた。読むたびに、新たな発見があった。さすがは、ずっと教科書に載っている名作である。

まずは、「こころ」から読み返そうと思う。果たして、今の自分に、瑞々しい感性や心を動かされるものが残っているだろうか。そんな心配がある。